［シンポジウム］

環バルト海地域の言語接触と言語変化[1]

三谷　惠子

本稿では環バルト海地域とされるヨーロッパ北東部に見られるさまざまな言語接触の事例をとりあげ、言語接触が作り出す地域の特性を考える。またいわゆる「言語圏」としての環バルト海地域の可能性について検討し、じっさいにはここが、接触によって形成された言語的連続体であることを示す。

1. 環バルト海の歴史と言語接触

環バルト海地域――その言葉通りバルト海を囲む地域には、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ポーランド、それにロシア北部が含まれる。ここには、印欧語族であるバルト語派、ゲルマン語派、スラヴ語派、また非印欧語であるウラル語族フィン・ウゴル語派に含まれるバルト・フィン語群の諸言語が分布し、これらの言語話者たちが互いに接触しながら多様な言語状況を作り出してきた[2]。なおバルト・フィン語にはフィン語（フィンランド語）、カレリア語、ヴェプス語、イングリア（イジョル）語、ヴォート語、エストニア語、リヴォニア（リーヴ）語が含まれ、これらは通常、共通のバルト・フィン祖語から発し、後者はさらにサーミ語とともにフィン・ウゴル語派の中で一つの群をなすとされる。バルト・フィン語は系統的に、ヴォート語、エストニア語、リヴォニア語それにフィン語西部方言を含む南西群と、フィン語東部方言、カレリア語、ヴェプス語、イジョル語を含む北東群にわけられる。現在ヴォート語とリヴォニア語は事実上ほとんど使用されていない（Laanest 1993: 32）。

考古学的知見によれば、環バルト海地域には、紀元前 3000 年頃すでに今のバルト・フィン人の祖先が居住しており、バルト・フィン語に見られる印欧語的特徴（繋辞の使用、SVO 語順、前置詞の使用など）からは、バルト・フィン語の古層が紀元前 2000 ～ 2500 年頃すでに印欧語族の祖先との接触――バイリンガリズム、異族婚による言語シフト――などを経験していただろうことが推測される（Laakso 2001: Vol.1:204）。またゲルマン人の祖先も、紀元前 1000 年頃にはスカンジナヴィア半島南岸からユトランド半島またドイツ北部といったバルト海沿岸西側に居住していたと見られる（Henriksen and Auwera 1994: 1）。考古学的史料以外に検証可能な資料がなく、考古学と言語学の判断は必ずしも一致しない上に、この地域は人の移動・移住と混交の繰り返された歴史をもつことから、紀元前の環バルト海の言語状況については

はっきりしない部分が多い。しかしこれらの異なる語族が先史時代の太古より接触下にあったことは、多くの借用語彙によって示唆される。たとえばフィン語の *rauta*「鉄」はゲルマン語の借用とされ（Orel 2003: 299）[3]、また *hammas*「歯」（フィン祖語で *hambas）はおそらくバルト語に関係づけられる（Laakso 2001: Vol.1: 201）[4]。

この地域の民族・言語地図を変えたのは、2 世紀から始まったゲルマン人の移動と拡大、つづく紀元 5 〜 6 世紀頃に活発化したスラヴ人の移動であった。スラヴ人は 10 世紀頃までに民族国家を建設し、現在のロシア、ポーランド、ベラルーシなどの基盤をこの地域に作りあげた。いっぽう 8 世紀から 11 世紀頃には北ゲルマン系ヴァイキングが交易活動を繰り広げて、スカンジナヴィアからバルト海沿岸東部エストニア方面に進出した。ヴァイキングの活動はキエフ・ルーシ建国に大きな役割を果たし、またロシアの古い名称「ルシ」にしばしば関係づけられる Routsi（フィン語でスウェーデン人）という呼称は、中世ギリシャ語 οἱ Ῥῶς「ノルマン人」（Vasmer 1987: 522–523）に代表されるようにノルマン人を指す言葉として広く用いられた。

12 世紀以降にはドイツ東方移住が進み、ドイツ人たちは 14 世紀にはポモージェ／ポメラニア（ポーランド北部）から現在のリトアニア南西部にまで進出して、ドイツ騎士団国（のちのプロイセン公国、東プロイセン）を建国した。環バルト海地域の大陸東側に広くドイツ人移住地が形成されたことは、この地域の地政学的状況のみならず、言語状況にもさまざまな影響を及ぼした。西バルト語の一つであった古プロイセン語（古プロシア語）の 15 世紀以後の急速な衰退そして 18 世紀の消滅はその大きなものの一つと言える（Gimbutas 1963: 26）[5]。

バルト海を囲んで東西に広がるこの地帯の言語接触には、ハンザ交易も関与した。12 世紀からすでに始まっていたハンザ都市間の交易はロシアのノヴゴロドにまで及び、東西に広がる交易圏の形成によって、とくに都市部での言語接触が活発化し当該地の言語に少なからぬ影響を残した。スカンジナヴィア語（ここではスウェーデン語）の名詞変化語尾の消失（下の表 1 と表 2 を比較：表は Trudgill 2010: 307 による）には、低地ゲルマン語の影響があったとしばしば説明されるが、この背景にあったのはハンザ都市交易におけるこれらの言語話者の接触だった（Trudgill *ibid.*）[6]。

〈表 1　古スウェーデン語の男性名詞変化　fisk「魚」〉

		不定形	定形		不定形	定形
単数	主	fisker	fiskerin	複数	fiskar	fiskanir
	属	fisks	fisksins		fiska	fiskanna
	与	fisk(i)	fiskinum		fiskom	fiskomin
	対	fisk	fiskin		fiska	fiskana

〈表 2　現代スウェーデン語の名詞〉

	不定形	定形		不定形	定形
単	fisk	fisken	複	fiskar	fiskarna

この変化については、ハンザ交易の始まる以前よりすでにパラダイムの平準化が始まっていたとする説もあるが、一般的には、接触という要因がなければこのような徹底した格語尾の喪失は起こらなかっただろうと考えられている（Jahr 2011: 121–122）。ハンザ交易の圏外にあったアイスランド語に古い北ゲルマン語の格変化が残されたという事実も、この接触要因説の傍証となっている。

環バルト海地域西部のスラヴ人とゲルマン人、また東部のスラヴ人とバルト・フィン人との接触の痕跡も、いたるところに見ることができる。

東プロシア地方[7]（現在はポーランド、ロシア、リトアニアに含まれる）は、ドイツ人が入植し、バルト族、スラヴ族と混在していたとされ、この地域のドイツ語方言にはスラヴ語の語彙が見出される。たとえばドイツ語プロシア方言辞書には「鋤」を表す Zoch/Zoche が掲載されているが、これはスラヴ語の socha「鋤」からの借用であり（Frischbier 1882: Vol.2: 496）、スラヴ人の農耕文化との接触があったことが示される。ここに見られるスラヴ語の語頭子音 [s] の z [ts] への置き換えは、母音に先立つ語頭位置に無声歯茎摩擦音 [s] が立つことがなかったという音韻的制約に起因しており、近似的な子音に置き換えたこの音形は、古い時代の借用であることを示している（Koptsev 2004: 38）。この語からは Zochbaum（ploughbeam 刃の部分と牛の轡をつなぐ横棒）のような、外来語と固有語を合わせた複合語も形成されており、借用語が受容言語の語彙体系に順化していたことが伺える。

バルト・フィン語とスラヴ語との接触もまた多くの痕跡を残しているが、バルト・フィン語に借用されたスラヴ語の形は、言語接触が東スラヴ語の形成より前の古い時代から生じていたことを示唆している。たとえばフィン語 plattina「リンネル」はスラヴ祖語 *poltьno に関係づけられ、ロシア語の полотно に対応するが、フィン語では母音重複形（pleophony）のない形で借用されている。また同じくフィン語 suntio「聖具保管係」はスラヴ祖語 *sǫdi「裁き」、*sǫditi「裁く」に由来し、同じ起源の借用語はエストニア語では sund「指示、命令」、リヴォニア語で sund「裁く」となるが、いずれも語基に鼻音 n を含む形になっている。これらの形については、10 世紀以後のロシア語とバルト・フィン語との接触による借用で、plattina のような形はフィン語の中で再度変化したとする見方もあるが、上記の例以外にも見られるスラヴ語とそこから借用されたバルト・フィン語の音韻対応は、Shakhmatov がかつて指摘したように、バルト・フィン人と共通スラヴ語時代のスラヴ人と間に接触のあったことを示しているように見える（Shakhmatov 1916: 34–35; Myznikova 2014: 16–17）。

環バルト海地域の地政学的状況の変転は、その後もこの地域の言語に大きな影響を及ぼした。16 世紀のポーランド・リトアニア国形成は、東スラヴ圏とくにベラルーシやウクライナの言語形成に少なからぬ影響を与えた。またキエフ・ルーシ時代より進んだロシアの北方拡大は、北ロシアに展開した正教会の布教活動に代表されるように北方バルト・フィン系住民のロシア語化を推し進め（Myznikova 2014: 18–25）、さらに 1700 年ペテルブルク建設以後ロシア文化の中心が北に移ったことにより、北方少数言語の多くが衰退に至った。いかし同時にこうしたバルト・フィン語話者のロシア語化は、繋辞の be 動詞現在形の消失や部分格の発達をはじめ多くの言語変化をロシア語にもたらした。

以後もここはプロイセン＝ドイツおよびロシアの勢力拡張、戦争、移住、国境の移動などを体験し、これに起因する複雑な言語分布の変遷、言語接触の場所となったのである。

2. 環バルト海地域の言語現象の諸相——言語接触という視点から

2.1. 言語接触とこれに起因する借用のタイプ

太古よりさまざまな言語文化が接触していた環バルト海には、多様な言語接触の事例が見られる。以下では借用のタイプ別に具体的な事例を紹介するが、まず本稿で用いるいくつかの用語、とくに「言語接触」「借用」について確認しておく。言語接触に関する研究が蓄積されてきた今日、「言語接触」「借用」といった語についての定義も多々提唱されているが、ここでは「言語接触」を、ある言語集団もしくは言語話者が、母語とは異なる言語についてなんらかの知識を有するような言語環境にあることをさし、「借用」は言語接触の結果、異なる言語の要素が別の言語に取り込まれる現象をさすものとする（Harris and Campbell 1995: 122）[8]。借用の元となる要素を提供する言語は「供給言語」、借用する側は「受容言語」である。

借用のタイプ分けもさまざまに可能であろうが、ここでは大きく「音形借用」と「構造借用」に区分する。これは Matras and Sakel (2007: 829–830) が導入した MAT（borrowed matter 借用形）と PAT（pattern replication パターン複製）に近い。音形借用には語彙や形態素の借用があり、構造借用つまり構造的複製には、音韻、意味、形態統語構造のさまざまなレベルの現象が関係する。

接触言語研究の中で現れる重要な概念に「基層作用」がある。本稿ではこれを、ある言語集団が別の言語への言語シフトを起こすさいに、移行先の言語の中にもとの言語の特徴が取り込まれるケースをさして用いる（Abaev 1956: 58; Thomason and Kaufman 1988: 38–39）。つまり基層作用は、供給言語の要素から受容言語への要素の移入、言い換えれば借用という現象のある特別別な起こり方を歴史的要因から特徴づけたものと理解する[9]。

2.2. 音形借用

音形借用は、供給言語の語彙や形態素がそのまま受容言語に取り込まれるもので、このうち語彙借用は、すでに前節でいくつかを挙げたように、供給言語の語彙を基本的に同じ意味で使用するものである。ただし先の socha > Zoch における s > z [ts] のように、多くの場合受容言語の音韻体系への適応というフィルターを通して採用される。

音形借用の中で、接触の強度と借用の起こり方という点から考えてより興味深いのは、形態素借用であろう。ここで形態素借用というのは、供給言語の形態素が、おそらく最初は語彙借用として受容言語に知られ、それがやがて語彙から離れ、受容言語の中で形態素として生産性をもつにいたった場合を指すものとする。言語接触研究で指摘されているように、語彙要素とくに内容語はもっとも借用されやすく、なんらかの文化的接触があればどこにでも起こりうるのに対し、接辞のような形態素は、当該形態素がもつ機能の理解とその受容言語への適応がなければ生じにくいため、語彙要素よりは借用されにくく、より強度の接触を必要とする。また Field（2002）はさらに、借用における要素の借用可能性についての過去の研究を総括しつつ、形態素のうち派生接辞などの膠着的接辞は屈折語尾のような融合的接辞よりは借用が起こりやすいという傾向性を示している（Field 2002: 37）。つまり音形借用の起こりやすさという点での階層性は次のようになる：

内容語＞機能語＞膠着的接辞＞融合的接辞

じっさい、数多くの音形借用の例が見られる環バルト海地域でも、系統の異なる言語間での融合的接辞の借用の例を見出すことはむずかしい。これに対して Field のいう膠着的接辞の借用例には、バルト・フィン語に広く見られるロシア語の -nik (-ник) 名詞派生形態素を挙げることができる。たとえばエストニア語の aed「庭」から aed-nik「庭師」、ヴェプス語 kala「魚」から kalanik「漁師」、フィン語の runo「詩」から runonikekka「詩人」など（Myznikova 2014: 39）。この借用は、-nik の形態と機能（もとの語から人を表す名詞を作る）の一対一の対応が比較的透明であるため、広くバルト・フィン語に浸透したと言えるかもしれない。

バルト・フィン語からロシア語への膠着的接辞借用の例も見出すことができる。たとえばカレリア語では、-ta-/-tä- という形態素が“使役”他動詞を形成する機能をもち[10]、このさい、派生元の語は名詞、形容詞、動詞でありうる。例：名詞由来 iäni「声」> iän-tä-y「発音・発声する」, voi「油」> voi-ta-u「（油を）塗る」; 形容詞由来 valmis「用意のできた」> valmis-ta-u「用意する」; 動詞由来 piäsö-y「渡す、出す」> piäs-tä-y「放す、行かせる」（Zajkov 1999: 107）。そしてこの形態素はそのままカレリア地方のロシア語方言に借用されて動詞を形成する要素となる：растоять「溶ける」> растаитать「溶かす」; плакать > плакотать「（～を）嘆く」。後者の場合は自動詞から他動詞を派生し

ているが、明確な使役の意味はない（Myznikova 2013: 342–345）。また自動詞から自動詞が派生される例もあり、この形態素は、他動詞派生を中心に動詞派生一般とて機能していると考えられる。

2.3. 構造借用

2.3.1. 言語接触研究では、文法構造の複製、あるいは構造借用から文法化へのプロセスなどが主に注目されるが、本稿で定義した構造借用には、アクセントやプロソディ、音韻特徴の複写も含まれる。

環バルト海地域におけるアクセント・パターンの変化としてよく指摘されるのは、ラトヴィア語における語頭ストレスの獲得だろう。これはふつう、バルト・フィン語とくにリヴォニア語の基層作用とされる（Balode and Holvoet 2001: 9）。Balode and Holvoet（ibid.）は、ラトヴィア語の語頭ストレスアクセント獲得にはバルト・フィン語の基層作用以外の要因も考えられないわけではないと示唆しているが、同じくバルト・フィン語との接触のある北方ロシア方言にも語頭ストレスの獲得（ти́шина「静けさ」cf. 標準ロシア語 тишина́; со́сна「松」– 標準ロシア語 сосна́）が見られ（Myzikova 2014: 25）、バルト・フィン語の基層作用とする通説には説得力がある。

接触を要因とする音韻変化として興味深い現象にはまた、ロシア北方方言の、子音の有声性に関する特徴の無効化がある。バルト・フィン語では基本的に子音の有声・無声の対立は発達していないか、あるいは存在しない（Laanest 1993: 32–33）。いっぽうバルト・フィン語と直接接触のあったノヴゴロド地方やプスコフ地方などのロシア語方言では、ほんらい有声・無声の対立が維持されるはずの位置の子音で、有声音の無声化、あるいはその逆の現象が報告されている。たとえば sabogi < sapogi（сапоги「ブーツ」）, zergalo < zerkalo（зеркало「鏡」）; mošno < možno（можно「できる」）, votočka < vodočka（водочка「水（指小形）」）など（Myznikova 2014: 50–51）。このような変異については、スラヴ祖語の弱化母音の消失と関係づける説も出されたが、弱化母音の消失はいずれのスラヴ語でも起きたのに対し、この有声性に関する変異は北方ロシア方言に固有の現象であるため、この説明では説得力に欠ける。これに対してバルト・フィン語の影響すなわち基層作用とする見方は、Kiparsky（1963: 96）が指摘したラトヴィア語やリトアニア語の方言に見られる類似現象という傍証もあり、より説得力があると考えられる（Čekmonas 2001b: 352）。

2.3.2. 構造借用は統語単位のさまざまなレベルで起こり得るが、句のようなより小さな統語単位の個別の構造借用は、数多くの例を見出すことができる。ここでは Myznikova（2013）が挙げているカレリア語の出格と北ロシア方言の iz+ 属格（生格）前置詞句の対応を引用しよう。

カレリア語ではある行為が生起する場所、たとえばものを買う場所について elative 出格（-sta「から」）が用いられる[11]。

(1) Kar　Oššiin　jarmankasta　prinäkkiä.
buy-PST　market-from
「市で（“市から”）プリニャークを買った。」

ロシア語ではふつう「買う」などの行為の場所表現には処格（前置格、多くの場合は「〜の中で」を表す前置詞 v をともなう）が用いられるが、この地方で用いられるロシア語では、出格に対応する意味の前置詞 iz（「から」）が用いられる（Myznikova 2013: 339）。

(2) RD　. . . vsjo　iz Norvegiji　pokupali.
all-ACC　from Norway　buy-PST.PL
「全部ノルウェーで（“ノルウェーから”）買ってきたものだ。」

2.3.3.　ロシア語方言に見られる、能動分詞過去（< *-ues-）に由来する述語を用いた結果構文も、構造借用とみなすことができるだろう。北ロシア方言では、次のような能動分詞過去形由来の述語を用いた構文があり、これは結果相（resultative）の意味を表す（例は Sobolev 1998: 75）。

(3) RD　Дедушка　уехавши.
grandfather-NOM.SG　leave-ACT.PST.PTPL
「お祖父さんは去ってしまった。」
(4) RD　Я чашку　помывши.
I cup-ACC.SG　wash.ACT.PST.PTPL
「私はカップを洗ってしまった。」

ここに現れる能動分詞過去形由来の述語形に該当するものは、標準ロシア語にはない。標準ロシア語では能動分詞過去は書き言葉として用いられ、形容詞語尾がついて名詞を修飾するか、あるいは、-в, -вшись のような不変化の副詞となって分詞構文を作るが、単独で主節の述語となることはない。いっぽうバルト語では、同じ *-ues- 起源の分詞が、be 動詞を助動詞として完了（結果相）の意味を表す複合時制形を作る。

(5) Latv Jānis ir paēdis un tagad lasa avīzi.
is eat-ACT.PTPL.M.SG and now read-3SG.PR newspaper.ACC
「ヤーニスはもう食べ終えてしまい、今は新聞を読んでいる。」
（Matiassen 1997: 144）

(6) Lith Jis [yra] šiltai apsirengęs.
he [is] warmly PREFIX-REFL-dress-PTPL.M.SG
「彼は暖かく服を着込んでいる。」（Drinka 2017: 351）

この北方ロシア方言（とくにノヴゴロド、プスコフ方言など）と同種の構文はまた、バルト語に隣接するベラルーシ語にも見られる（Čekmonas 2001a: 116）。ロシア語のみならずスラヴ語に能動分詞を単独で主節の述語に用いる構文がなく、いっぽうバルト語では be+ 能動分詞が完了形として用いられることから、北ロシア方言の -vši タイプの述語構文はバルト語の構造借用であることが強く示唆される。Čekmonas はロシア語に見られるこの分詞由来述語のバルト語由来説を補強する例として、バルト語圏で暮らす旧教徒たちが話すロシア語にこの特徴が顕著に見られる事実に言及している（Čekmonas 2001: 116; Drinka 2017: 351）。

(7) RD v jego naga slomafšy.
at him leg-NOM.SG fracture-ACT.PTPLP
「彼は足が折れた」

3.「言語圏」としての環バルト海地域の可能性

3.1.「言語圏」について

前節で概観したように、さまざまな接触事実が認められ、太古の時代から文化的にも近接して歴史を作ってきた地域の言語については、古くより言語圏をなすのではないかという指摘があった。

系統によるのではない言語間の類似については、たとえばバルカン半島諸言語の類似性を指摘した Kopitar（1829）や Miklosich（1861）など 19 世紀の研究者たちがつとに注目していたが、こうした言語的類似性と地理的連続性の関係に名前をつけて明示的に示したのは Trubetzkoy であった。

「地理的、文化・歴史的地域に含まれる諸言語が、とくべつな類似的特徴を複数共有し、それらが共通の起源ではなく長期間の隣接と並行的発達に起因する、という場合がある。この、系統的分類によるのではないグループについて、私は“言語連合”（языковые союзы）という名称を提案したい」（Trubetzkoy 1995 [1923]: 333）として彼が最初に用いた языковые союзы は、1928 年に改めてドイツ語で「言語圏（Sprachbund）」

と訳されて以後、言語学の一つの重要な概念として定着した。

言語圏に関する研究が類型論や言語接触論の発展とともに進んだ現代でも、「言語圏」の定義の基本は大きく変化してはいない。Haspelmath（2008）では「地理的に連続した複数の言語が、共通の祖語に由来するものではないいくつかの構造特徴を共有し、それらの特徴によって周囲の言語とは異なって際立つと認知される場合」（Haspelmath 2008: 1492）とあり、いっぽう Thomason（2001）では「偶然、あるいは共通の祖先からの継承としてではなく、言語接触によって複数の構造的特徴を共有するに至った 3 つ以上の言語を含む地理的範囲」（Thomason 2001: 99）とある。Haspelmath は「周囲の言語とは異なって際立つ」、Thomason では「3 つ以上の言語を含む」など、それぞれに言語圏と認定する基本要件が異なってはいるが、いずれにしてもこれらで言われていることを集約すると、地域的連続性をもつ複数の言語の間に複数の、いわば後天的に獲得された構造的特徴が共有されているような場合を言語連合とみなす、ということになろう。

言語圏の代表的な例――というよりはむしろ言語圏の定義のもととなったケース――はもちろんバルカン言語圏である。バルカン半島では、スラヴ語（ブルガリア語、マケドニア語）、ロマンス語（ルーマニア語、アルーマニア語）、またアルバニア語やギリシャ語など印欧語族の異なる言語が分布し、さらには非印欧語のトルコ語も歴史的、文化的に深く関わってきた。そしてじっさいこれらの言語は、複数の構造的特徴を――もちろん濃淡の差はあり、それぞれの発生と拡散のあり方は同一ではないにせよ――共有している。何をもってバルカン言語圏の特徴とするかには、Sandfeld, Schaller, Gołąb, Lindsted など研究者によって異同はあるが、いずれの研究者も、ここに含まれるほとんどの言語に、いわゆる後置冠詞の使用、属格と与格の融合、不定詞喪失、will 型の未来形など複数の構造的類似性を認めている（Tomić 2004: 6）。

さて、この Trubetzkoy の「言語圏」という指摘に触発されて、Jakobson は環バルト海地域にこれが適応されうると指摘した。Jakobson が注目したのはこの地域の複数言語に見られる音韻的音調（高低）の対立であり、ここに「音韻的言語圏」を見出したのだった（Jakobson 1962 [1931]: 137）。

〈表 3　Jakobson の「音韻的言語圏」〉*

音調の対立がある言語・方言		
語派	言語・方言	比較
ゲルマン語	ノルウェー語、スウェーデン語、デンマーク語、低地ドイツ語の一部	ドイツ語 － （ゲルマン祖語 －）
バルト語	リトアニア語、ラトヴィア語	バルト祖語 ＋

バルト・フィン語	エストニア語、リーヴ語	フィン語 ー (バルト・フィン祖語 ー)
スラヴ語	カシューブ語北部方言 (スロヴィンツ語)	ポーランド語ー カシューブ語ー

* 表の中央列は、Jakobson が「音調の対立を音韻的に持つ」とした言語、右列の「比較」は同系統の言語に同種の音調的対立があるかを本稿筆者の判断で示したもので「ー」はそのような対立をもたないことを意味する。

表 3 でわかるように、たしかにバルト語以外のケースでは、いずれも祖語あるいは近隣の同族言語にも音調的対立の特徴はなく、この特徴が“後天的”に獲得されたものであることが示唆される。このうちスカンジナヴィア語（ノルウェー、スウェーデン語）の音調は、単音節語に現れる単音調と二音節語に現れる複音調の二つのピッチタイプからなるもので、二音節でありながら単音調をもつ語形（接尾辞化した冠詞的要素のつく場合、あるいは最終子音群に -e- が挿入されている場合など）の条件から、この超分節的特徴は 13 世紀に至る前に獲得されていたとされる（Faarlund1994: 45）。

バルト・フィン語の中で音調をもつエストニア語、リヴォニア語については、その発生や理論的解釈にさまざまな異論があるが、Lehiste（2003）は、エストニア語にピッチ特徴が現れエストニア語と極めて近いフィン語にこの特徴がないことを議論の出発点に、エストニア語では非語頭音節の音韻脱落、およびその代償としての語頭音節の延長化（超長母音の形成）が生じこれが音調の発生起源となったとしている。前者は 13 世紀頃、また後者は 14 世紀頃に生じたとされ、そこに母音長および音節構造などの要因が関与して、母音の長さにピッチ変動がオーバーラップした音調パターンが形成されたと考えられる（Lehiste 2003; cf. Harms 1962: 14–15; Hulst 1993: 93）。

環バルト海地域に含まれるスラヴ語の中で唯一 Jakobson が音調対立を認めたのは「カシューブ語北部方言（das Nordkaschubische）」だったが、これはおそらく、今は死語となったスロヴィンツ語のことであり、Lorentz によればこのスラヴ語は 2 種の音調をもっていた（Lorentz 1903: 168–169)。しかし死語であるため実態がどのようなものであったかははっきりわからず、Koptjevskaja-Tamm（2006: 199）は音調特徴というよりは母音長の変動にともなって現れるピッチ変動かもしれないとしている。

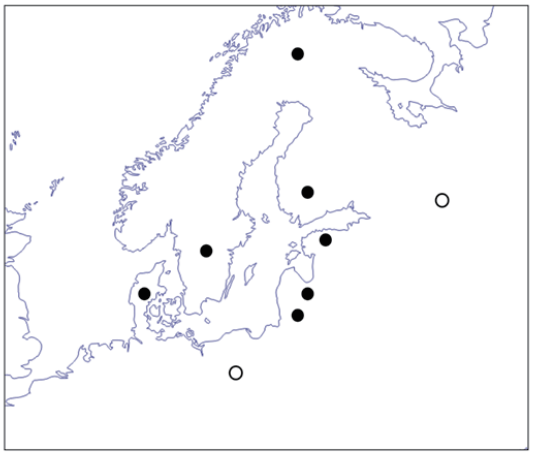
このように、それぞれの言語でその「音調」の起源や音韻的性質は同じではなく、これをひとしく同種の現象として扱うことには疑問も感じられるが、表層的類似という点ではたしかに、言語圏的な連続性の存在を示唆するものではある[12]。

3.2. 語順特徴

音調現象以外にも、環バルト海地域の複数言語に見られる共通特徴として、語頭ストレスの優位や長母音と短母音の区別といった音声特徴、あるいは再帰標識の動詞接尾辞化、属格（生格）と異なる部分格などの形態的特徴、また have 動詞による所有表現の欠如、分詞起源の伝聞法形式、能動分詞由来の述語形、受動分詞による無人称文、主格形補語といった統語特徴、そして SVO 語順かつ GN 語順の優勢などが指摘されている（Dahl and Koptjevskaja-Tamm 2001; Koptjevskaja-Tamm 2006; Drinka 2017: 314–407）。

このうち類型論でもよく論じられる基本語順の特徴で見ると、じっさい環バルト海のこの地域にはある種の類似した傾向が見られる。下の図 1 はオンラインで参照できる世界言語アトラス世界言語（WALS）に依拠して作成したもので、S, V, O の基本要素が SVO になる言語において、名詞 N に対してそれを修飾する属格 G が NG 語順になるか、GN になるかを表示したものである。

〈図 1　WALS による SVO&GN/SVO&NG の分布〉



● SVO&GN語順
北部サーミ語, フィン語,
エストニア語,
ラトヴィア語, リトアニア語,
デンマーク語, スウェーデン語

○ SVO&NG語順
ロシア語, ポーランド語
[左の地図上に表示なし]
アイスランド語, フランス語
イタリア語, ルーマニア語

WALを簡略化して表示　[http://wals.info/combinations/81A_86A#2/58.6/52.6]

この地図からは環バルト海地域の言語に SVO 語順でかつ GN 語順という語順の組み合わせが顕著であることが見て取れる（Sulkala and Karjalainen 1992: 227）。

(8) Finn　tytön　kissa
girl-GEN　cat-NOM
「女の子の猫」

(9) Lith vaĩko rankà
child- GEN hand-NOM
「子供の手」

(10) Latv mātes darbs
mother- GEN job-NOM
「母の仕事」

(11) Sw bilens ejer
car- GEN owner-NOM
「(その) 車の所有者」

WALS の解説によれば、SVO 語順言語では、GN、NG との組み合わせはどちらも同じように広く分布し、SVO&GN という組み合わせは類型論的に特異なものではない[13]。とはいえヨーロッパ大陸西部の諸言語では SVO&NG 語順が優勢であることに鑑みると、SVO & GN 語順が環バルト海地域に連続分布することは示唆的である。そもそもバルト・フィン語は元来 SOV 言語であり、スラヴ語やゲルマン語との接触の影響により SVO 語順を獲得したとされる。またこの地図ではロシア語は SVO&NG タイプとなっており、じっさい標準語では確かにそうだが、同時に環バルト海地域に住むロシア人のロシア語では GN 語順の優位が知られている。Leisiö の調査した、フィンランドのキュロラ（Kyyrölä）で使用されているロシア語では、非方言話者で NG 語順と GN 語順がほぼ 6 対 4 であるのに対し、この地方のロシア方言話者では NG 語順が 12%に対して GN が 88 % と圧倒的に GN 語順が優位となっている（Leisiö 2000: 309; Heine 2008: 43）。言語接触研究においては、語順は語彙について影響を受けやすい言語領域であることがしばしば指摘されており（たとえば Thomason and Kaufman 1988: 88）、このことを考え合わせるとの環バルト海地域に広く見られる語順の同類性もまた、言語圏的要素の一つと言えるかもしれない。

3.3. 非「言語圏」的な構造的類似

このように言語圏を予想させる特徴があるいっぽうで、そのほかの現象についてみると、並行的な現象ではあっても起源的には異なるものである可能性を排除できなかったり、あるいは環バルト海地域全体に及ぶ言語現象として扱うのは困難であったりと、言語圏を形作る要素と認めるにはやや不十分と思われるものが多い。

たとえば環バルト海地域東部の言語に見られる統語的類似現象として、主格形補語の問題が古くより取り上げられてきた。主格形補語は、他動詞の直接補語の位置にある名詞が主格形で現れるもので、具体的な例は以下のようなものである。

(12) Est〈不定詞 + 主格形補語〉

Minu ülesandeks on lahendada see küsimus.

my-GEN tasktransl.SG be-3.PR solve.INF this.NOM question.NOM.SG

「私の仕事はこの問題を解くことだ。」（Miljan 2008: 82）

(13) Finn〈命令形＋主格形補語〉

Tuo sateenvajo!

bring-IMPR unbrella-NOM

「傘を持ってきて！」（Nelson 2013: 57）

(14) Latv〈義務形 (debitive) ＋主格形補語〉[14]

Man jālasa avīze.

1SG.DAT read.DEB newspaper-NOM.M.SG.

「私は新聞を読まねばならない。」（Mathiassen 1997: 130）

(15) Lith〈無人称述語＋不定詞＋主格形補語〉[15]

Reikia laukai arti.

needs fields-NOM.PL plough-INF

「畑は耕す必要がある。」（Ambrazas 2001: 404）

(16) OR〈不定詞 + 主格形補語〉

aže buděte xolьpь ubitь .ā. grivna serьbra zaplatiti

if be-2PL.FT nom.F.SG killed 1 grivna-NOM sivler pay-INF

「もし奴隷が殺されたなら銀 1 グリヴナが支払うべきものとする」

（Timberlake 1974: 8）

(17) RD ne tebe na ètovo konja uzda nadëvat'.

NEG DAT on this-ACC horse-ACC ratsmed-nom.F.SG put_on-INF

「（お前が）馬に轡をはかせるものではない」（Timberlake 1974: 104）

環バルト海地域に分布する言語はいずれも対格言語であり、能動態の他動詞を述語として作られる節に現れる主格はほんらいその動詞の統語的主語であるはずで、直接補語が主格形をとることは基本的にはない。この点でこれらの文はいずれも異例（anomalous）である。

主格形補語の現れる環境は、バルト・フィン語では基本的に不定詞また命令形動詞の補語、リトアニア語方言では不定詞補語、またラトヴィア語では義務形の補語、ロシア方言ではまず不定詞、しかしまた 2 節に述べた能動分詞起源の述語の補語[16]などと、それぞれで異なっているが、それでもたとえば Larin（1963）は「言語ごとの文法的特徴の異なりを越えてこれらの類似性は明らかである」としている（Larin 1963: 24）。たしかにいずれの構文も、主格形主語つまり統語上の主語を欠く中で、ほんら

いの対格補語が主格形となり主題的な要素として現れるという点で共通する。これらの構文の発生について Timberlake は、出現環境の類似からこれらが同一起源——西バルト・フィン語に由来し、接触によって拡散したものと考えた（Timberlake 1974: 198–199）。いっぽう Ambrazas（2001）はバルト語における主格補語構文の起源を古い名詞主格の名残とみなし、与格形の行為名詞とともに用いられた名詞文が、バルト・フィン語との接触で再解釈されたと考えた。主格補語についてはさまざまな解釈や発生についての議論がなされているが、すくなくとも不定詞構文に現れる主格補語については、これらの根本に mihi-est タイプの存在文とそこに用いられた主格名詞があり、それが特別な統語環境に置かれた結果、主格形補語となったこと、またそこにはバルト・フィン語、バルト語、スラヴ語（ロシア北方言）の長い接触による相互影響があったこと、はおおむね確かであろうと考えられる。とはいえバルト・フィン語の命令文に現れる主格名詞や、ラトヴィア語の義務形のように比較的新しい派生的な述語形式に現れる場合などもひとくくりに「主格形補語」現象としてよいかについての疑問は残る。また、ロシア方言で分詞述語に現れる上記の хорошая жена взявши のような構文との関係はどうつけられるのか、なども課題となるように思われる。

また、複数の言語に見られるとは言え、言語圏の特徴と認めるには弱いように見える現象として、証拠性（evidentiality）の表現があげられるだろう。フィン語では、発言動詞（「言う」「発言する」）や知覚動詞（「聞く」「見る」など）を主節の述語とする文で、従属成分が下の (18) の (i)(iii) のように補文になる場合と (ii)(iv) のように分詞構文となる場合がある（以下の例文 (18) は Campbell（1991: 286–287）に依拠）。

(18) Finn

(i) kuul-in, että hän puhuu sii-tä
hear-PST-I that he speak-3.PRS.IND it-about
「私は彼がそれについて話すのを聞いた」

(ii) kuul-in hänen <u>puhuvan</u> sii-tä
hear- PST-I he-SG.GEN speak-ACT.PR.PTPL it-about
（(i) と同じ（直訳：「彼のそれについて話すを聞いた」））

(iii) poika sano-i että isä kävi kotona
boy say-PST that father visit-PST home-in
「少年は、自分の父親が家を訪ねてきたと言った」

(iv) poika sanoi isän <u>käyneen</u> kotona
boy say-PST father-SG.GEN visit-ACT.PST.PTPL home-in
（(iii) と同じ）

さてエストニア語にもこれと並行的に、発言・知覚動詞の補語相当句が (v) のように補文となる場合と並んで、(vi) のように分詞を用いる構文がある。

(18) Est

(v) sai kuulda et seal üks mees elab
got hear-INF that there one.NOM man.NOM live-3.PRES
「そこに人が住んでいると（彼・彼女は）聞き知った」

(vi) sai kuulda seal ühe mehe <u>elavat</u>
got hear-inf there one.GEN man.GEN live-ACT.PR.PTPL
（(v) と同じ）

さらにエストニア語には、ここから派生した、フィン語にはない構文がある。この構文では、上の (vi) で用いられている -vat 形の能動現在分詞が補文の述語として用いられる。この形は“間接叙法”（modus obliquus［以下 MO］あるいは modus relativus）とよばれる。

(vii) sai kuulda seal üks mees <u>elavat</u>
got hear-INF there one.NOM man.NOM live-MO
「彼はそこに人がすんでいると聞き知った」

さらに MO は次の (viii) のように単独で主節述語になり、間接証拠（伝聞）の意味を表す。

(viii) ta <u>tegevat</u> tööd
he-NOM do-MO work-PARTV
「彼は働いているそうだ」

そしてこのバルト・フィン語の分詞形に由来する間接叙法形と並行的な現象が、バルト語にも見られる（リトアニア語の例は Koptjevskaja-Tamm and Wälchi 2001: 717）。

(19) Lith

(i) Girdėjau, jis <u>gyvenąs</u> mieste.
heard-1SG he-NOM live-ACT.PR.PTPL.NOM.M.SG town-LOC
「彼は街に住んでいると私は聞いた。」

(ii) Užkastieji pinigai degą.
buried-NOM.PL.M.DET money-NOM.PL burn-ACT.PR.PTPL.NOM.PL.M
「埋蔵金が燃えているらしい。」

ただしラトヴィア語では -ot という能動現在分詞に由来する不変化の述語が形成されており、これが“伝聞”の形式で用いられる（ここでは便宜的にこれにもエストニア語と同じく MO とする）。

(20) Latv
(i) Viņa teica, ka braukšot uz Franciju.
she-NOM say-PST that travel-MO prep France
「彼女はフランスに旅行すると言った。」（Prauliņš 2012: 164）
(ii) Ziema būšot siltaka neka parasti.
winter-NOM be-MO milder than usual-adj
「いつもより暖かい冬になるだろう。」（Prauliņš 2012: 165）

能動分詞由来の述語を用いた伝聞法は、ロシア語のみならずスラヴ語にはもとより知られておらず、また西バルト語であった古プロイセン語でも確認されていない。ここからこのような用法は、スラヴーバルト圏では東バルト語内で発展したものと考えられる。そしてこの形をもつリトアニア語、ラトヴィア語がバルト・フィン語と接触にあったことから、バルト語におけるこの構文はバルト・フィン語との接触によって生じたかあるいは発達したことが推測される。

エストニア語とラトヴィア語の間に強い相関性をみせるこの間接叙法の発達については、ドイツ語の接続法の影響も指摘されている（Cambell 1991: 294）。エストニア語の場合はともかく、フィン語へのドイツ語の直接的影響は考えにくく、この点を考慮すると、この構文の発達をドイツ語との接触という要因に一義的に還元することは難しいだろうが、しかし環バルト海地域大陸東側の長期間にわたるドイツ語の存在を考えると、なんらかの傍層的作用あるいは地域的連続性による影響は考慮されるべきかもしれない。

このように見ると、バルト・フィン語およびバルト語に見られる間接叙法は、複数言語の間に見られ、周辺言語と異なる特徴という点で、Haspelmath が指摘した言語圏の特徴になりそうではある。しかし同時にこの形式が文法化された地域は局所的であり、環バルト海地域全体を特徴づけるとするには不十分であるとも言える。

4. 広域言語接触圏としての環バルト海地域

これまで見てきたように、さまざまな言語接触のパターンと分布の多様性を示すこ

の地域だが、地域性を測るべき言語特徴を変えると、ここは異なる等語線の走る地域となる。たとえば、いわゆる「標準ヨーロッパ型」の特徴の一つである冠詞の有無で見ると、ゲルマン諸語には冠詞があり[17]、バルト語、スラヴ語、バルト・フィン語には冠詞類の発達は生じなかった。

また、いわゆる「外部所有」[18]に与格を用いる構文を Haspelmath は図 2 のように示している（Haspelmath 1999: 116）。

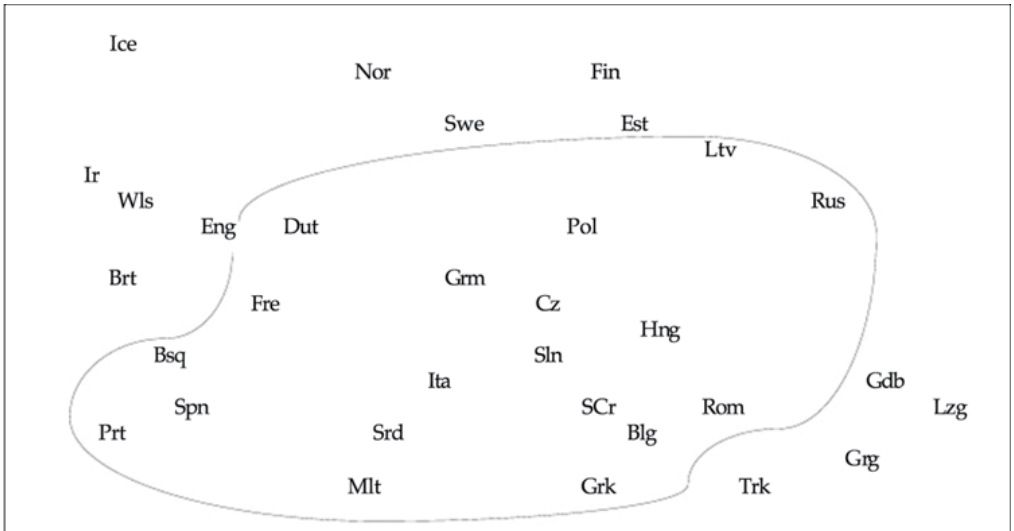


FIGURE 1: *The geographical distribution of the dative EP construction in Europe*

〈図 2　ヨーロッパにおける外部所有構文の分布〉

外部所有与格はヨーロッパ言語に広く見られ標準ヨーロッパ型タイプの典型的特徴の一つとみなされているもので、環バルト海ではドイツ語やスラヴ語（ロシア語、ポーランド語など）はこれに該当する構文を作ることができる。

(21) Grm Die Mutter　wusch　<u>dem Kind</u>　die Haare.
THE MOTHER-NOM　wash-PST　the child-DAT　the hari-ACC
「母親は子供の（に）髪を洗った」

(22) Pol Robert　rozbił　Piotrowi　samochód.
Robert-NOM　break-PST　Peter-DAT　car-ACC
「ロベルトはピョトルの（に）車を壊した」

(23) R Petja　slomal　Vase　ruku.
Petja-NOM　break-PST　Vasja-DAT　hand-ACC
「ペーチャはヴァーシャの（に）腕を折った」

いっぽうバルト・フィン語や北ゲルマン語では与格を用いる構文は欠如する[19]。

このようにみると、環バルト海地域は、バルカン言語圏のように、複数の言語においてその周辺同族言語にはない複数の特徴が顕著に見出される（たとえば後置冠詞やwill 未来）という意味での言語圏ではなく、むしろ、ゆるやかな言語的連続体としての地域と捉えた方がよいように思われる。

ゆるやかな言語的連続体という特徴をよく示すのが、2 節で言及した能動分詞由来の述語を用いた結果構文だろう。これは、ロシア北部のノヴゴロドやプスコフあたりで -n-/-t- 形をとる受動分詞による結果構文と競合する：

(24) RD У него уйдено.
at him leave-PSS.PST.PTPL
cf. Он ушедши.
he-NOM leave-ACT.PST.PTPL
「彼は行ってしまった。」

(25) RD U menje bylo telënka zarezano.
at me be-PST.N calf-ACC.SG.N slaught-PST.PTPL
「私はもう子牛を屠殺してしまった。」（Drinka 2017: 344）

-n-/-t- 受動分詞による結果構文はスラヴ語全体に広く用いられているが、〈u+ 属格〉で所有を表すという、おそらくはこれもバルト・フィン語の基層作用と考えられる東スラヴ語式の所有表現とともに用いられるパターンは、環バルト海スラヴ語にしか見られない。しかしこの〈u+ 属格〉という所有表現は、より西に位置しゲルマン語との直接接触のある西スラヴ語では、標準ヨーロッパ型の have 動詞に置き換えられ、have+-n/-t 構文となる。

(26) Pol Od tygodnia mam samochód zepsuty
for week have-1SG carACC.SG break-PST.PTPL.ACC.SG
「一週間私は自転車が壊れたままだ」（Drinka 2017: 344）

このように見ると、方言学でいう方言連続体に類した、接触による言語接触連続体のような図が見えてくるのではないだろうか。

5. まとめ

バルカン的な意味での言語圏の形成には、長期にわたる広域的な接触による言語文

化圏の存在が含意されるだろう。いっぽう、環バルト海域では、長い歴史の異なる時代に異なるタイプの接触が異なる領域に生じた。そのため、Koptjevkskaja-Tamm（2006）が言うような“重層的言語接触ゾーン”、あるいは言語接触連続体は形成されたものの、環バルト海全体を包括するような際立った特徴をもつには至らなかったと考えられる。中世以後の時代において西にゲルマン（ドイツ、スウェーデン）、東にロシアという強力な政治・文化圏が形成された、といった社会的要因もここには重要に関わるだろう。

環バルト海は、バルカン的意味での言語圏ではなくとも、長期間にわたるさまざまな文化・言語の接触を含む地域であり、個別の言語現象の発生と拡大（あるいは喪失）の過程をその社会的背景や要因とともに明らかにすることが重要である。

略号

ACC　対格
ACT　能動
BSl　バルト＝スラヴ祖語
CSl　共通スラヴ語
DAT　与格
DET　定
ELA　出格
Est　エストニア語
Finn　フィン語
GEN　属格（生格）
Grm　ドイツ語
IMPR　命令形
INF　不定詞
Kar　カレリア語
LOC　処格
Latv　ラトヴィア語
Lith　リトアニア語
M　男性
NOM　主格
ONor　古ノルド語
OR　古ロシア語
PARTV　部分格

PGmc　ゲルマン祖語
PL　複数
PR　現在
PST　過去
PTPL　分詞
R　ロシア語
RD　ロシア方言
REFL　再帰
SG　単数

注

1 本稿は平成 29 年 6 月 17 日に上智大学で開催された日本スラヴ学研究会シンポジウム「バルト諸語とその隣人たち」で行った口頭報告「環バルト海地域の言語接触と言語変化」を改訂したものである。なお本稿中の用例はいずれも引用文献にあるとおりの表記で掲載した。そのためロシア語の例文ではキリル文字表記のものと、ラテン文字に翻字したものがある。ただしグロスは本稿で統一した。本稿の略号については文末の略号一覧を参照のこと。

2 環バルト海地域諸言語の詳細なリストは Dahl and Koptjevskaja-Tamm 2001: Vol.1: XVIII–XIX.

3 cf. ONor rauđi, PGmc *raušđōn; cf. CSl *rudъ「赤い」。

4 BSl *źombos; CSl *zǫbъ; Lith žam̃bas「へり、端」, Latv zobs「歯」など。

5 Toporov によれば、すでにドイツ化した古プロイセン人たちの間では 19 世紀前半まで古プロイセン語的要素とくに語彙は用いられていた（Toporov 2006: 56）。

6 Trudgil は、このよく知られた言語変化を、接触に触発された変化に見られる一般的傾向の一つである形態素の簡略化の例として挙げている。

7 通常「プロイセン」と表記されるが本稿ではバルト語の古プロイセン語との混同をさけるために地名ならびにゲルマン人の作った国家については「プロシア」とする。

8 「借用」（borrowing）をここでいう音形借用に限定し構造借用については「複製」とする立場もある（Heine and Kuteva 2010: 87）。

9 「基層作用」（substratumm inference）と「借用」（borrowing）を区別する立場はたとえば Thomson and Kaufam 1988.

10 バルト・フィン語研究では「派生元の語が、行為や事象のプロセスの要因を表すような他動詞を使役動詞とする：Myznikova 2013: 342; カレリア語の -ta-/-tä- はバルト・フィン祖語の *-tta- に由来し、ほかのバルト・フィン語でも同種の派生接辞がある（Zajtseva 1978: 44–45; Myznikova 2013: 343）。

11 フィン語でも「買う」「見つける」といった動詞では同じように elative が用いられる：

Elmeri löysi kirjan kirjastosta.
Elmer find-PST+3SG book-ACC library-ELA
「エルメルはその本を図書館で（“図書館から”）見つけた」（Huumo 2006: 42）

[12] 環バルト海言語のプロソディ特徴について詳しくは Koptjevskaja-Tamm (2006) を参照のこと。

[13] http://wals.info/chapter/86（2017 年 6 月 1 日アクセス）

[14] ラトヴィア語の義務形は、通常関係代名詞起源とされる ja- に動詞現在 3 人称形が合わさった不変化の述語形をとる。時制を表すためには be 動詞の時制形を助動詞として用いる。

[15] 櫻井映子氏によればこのような構文は現代標準リトアニア語では許容されないという。ここでは方言あるいは古い要素として可能な構文と扱っておく。

[16] たとえば：
Жена хорошая у меня из Ленинграда взявши
wife good-NOM at me from Leningrad take-ACT.PST.PTPL
「私にはレニングラードからもらったいい妻がいる」（Sobolev 1998: 83）

[17] ただしスウェーデン語は不定冠詞が前置冠詞であるのに対し、定冠詞は後置である：en son [a son] ― son-en [the son]）

[18] 本来は〈所有者 ― 被所有物〉で名詞句を構成するような関係の所有者役割名詞が、節の述語の項でないにもかかわらず、名詞句外に項のように現れる構文をさす。

[19] ただしこの構文が可能な言語でも、外部所有与格が使えるかどうかは、主語と所有者と所有物の関係、所有のタイプ、また述語動詞の意味などによってさまざまな制約がある。

参照文献

Abaev 1956 — Абаев В. О языковом субстрате // Институт языкознания. Доклады и сообщения. IX. M. 1956. 57–69

Ambrazas, Vytautas. 2001. On the Development of the Nominative Object in East Baltic. In: Östen Dahl and Maria Koptjevskaja-Tamm (eds.) *The Circum-Baltic Languages: Typology and Contact*. Vol. 2, 391–412.

Balode, Laimute and Axel Holvoet. 2001. The Latvian language and its dialects. In: Östen Dahl and Maria Koptjevskaja-Tamm (eds.) *The Circum-Baltic Languages: Typology and Contact*. Vol. 1, 3–40.

Campbell, Lyle. 1991. Some Grammaticalizaiton changes in Estonian and their implications. In: Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization.* Vol.1, 285–299. Amsterdam: John Benjamins.

Čekmonas, Valeriy. 2001a. Russian varieties in the southeastern Baltic area: Rural dialects. In: Östen Dahl and Maria Koptjevskaja-Tamm (eds.) *The Circum-Baltic Languages: Typology and Contact*. Vol. 1, 101–136.

Čekmonas, Valeriy. 2001b. On some Circum-Baltic features of the Pskov-Novgorod dialect. In: Östen Dahl and Maria Koptjevskaja-Tamm (eds.) *The Circum-Baltic Languages: Typology and Contact*. Vol. 1, 339–359.

Dahl, Östen, and Maria Koptjevskaja-Tamm (eds.) 2001. *The Circum-Baltic Languages: Typology and Contact*. Vol. 1–2. Amsterdam: John Benjamins.

Drinka, Bridget. 2017. *Language Contact in Europe. The Periphrastic Perfect through History*. Cambridge: Cambridge University Press.

Faarlund, Jan Terje. 1994. Old and Middle Scandinavian. In: König, Ekkehard and Johan van der Auwera (eds.) *The Germanic Languages,* 38–71.

Filed, Fredric. 2002. *Linguistic Borrowing in Bilingual Contexts*. Amsterdam: John Benjamins.

Frischbier, Hermann. 1882–1883. *Preussisches Wörterbuch: Ost- und westpreussische Provinzialismen in alphabetischer Folge.* Bd. 1–2. Berlin: Enslin.

Gimbutas, Marija. 1963. *The Balts*. London: Thames and Hudson.

Harms, Robert T. 1962. *Estonian Grammar*. Bloomington: Indiana University.

Harris, Alice and Lyle Campbell. 1995. *Historical Syntax in Cross-Linguistic Perspective*. Cambridge University Press.

Haspelmath, Martin. 1999. External possession in a European areal perspective. In: Doris L. Payne and Immanuel Barshi (eds.) *External Possession*, 109–135. Amsterdam: John Benjamins.

Haspelmath, Martin. 2008. The European linguistic area: Standard Average European. In: *Language Typology and Language Universals: An International Handbook = Sprachtypologie und sprachliche Universalien : Ein internationales Handbuch = La typologie des langues et les universaux linguistiques : Manuel international. Volume 2 / 2. Halbband / Tome 2 Volume 2 / 2. Halbband / Tome 2*, 1492–1510.

Heine, Bernt. 2008. Contact-induced word order change without word order change. In: Peter Siemund and Noemi Kintana (eds.) *Language Contact and Contact languages*, 33–60. Amsterdam: John Benjamins.

Heine, Bernd and Tania Kuteva. 2010. Contact and Grammaticalization. In: Raymond Hickey (ed.) *The Handbook of Language Contact,* 86–105.

Herinksen, Carol and Johan van der Auwera. 1994. The Germanic Languages. In: Ekkehard König and Johan van der Auwera (eds.) *The Germanic Languages*, 1–18.

Hickey, Raymond (ed.) 2010. *The Handbook of Language Contact.* Chichester: Wiley-Blackwell.

Hulst, Harry van der. 1999. *Word Prosodic Systems in the Languages of Europe*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Hummo, Tuomas. 2006. “I woke up from the sofa”: Subjective directionality in Finnish expressions of a spatio-cognitive transfer. In: Marja-Liisa Helasvuo and Lyle Campbell (eds.) *Grammar from the Human Perspective. Case, space and person in Finnish*, 41–66. Amsterdam: John Benjamins.

Jahr, Ernst Håkon. 2011. Sociolinguistics in historical language contact: the Scandinavian languages and Low German during the Hanseatic period. In: Ernst Håkon Jahr (ed.) *Language Change: Advances in Historical Sociolinguistics*, 119–140.

Jakobson, Roman. 1962 [1931]. Über die phonologischen Sprachbünde. In: *Selected Writings.* 1*,* 137–144. The Hague: Mouton.

Jartseva 1993 — Ярцева В. и Ю. С. Елисеев (отв.ред). Уральские языки. Языки мира. М.

Kiparsky, Valentin. 1968. Slavische und baltische b/p-Fälle. *Scando-Slavica* 14: 73–97.

König, Ekkehard and Johan van der Auwera (eds.) 1994. *The Germanic Languages*. London/ New York: Routledg.

Kopitar, Jernej. 1829. Albanische, walachische und bulgarische Sprache. *Jahrbücher der Literatur*. Bd. 46: 59–106. Wien: C. Gerold.

Koptjevskaja-Tamm, Maria. 2006. The Circle That Won’t Come Full: Two Potential Isoglosses in the Circum-Baltic Area. In: Yaron Matras, April McMahon and Nigel Vincent (eds.) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*, 182–226. New York: Palgrave Macmillan.

Koptjevskaja-Tamm and Bernhard Wälchi. 2001. The Circum-Baltic languages: An aerial-typological approach. In: Östen Dahl and Maria Koptjevskaja-Tamm (eds.) *Cirtum Baltic Languages*. Vol. 2, 615–750.

Koptsev 2005 — *Копцев И. К проблеме языковых контактов между немецким и славянскими языками в ареале бывшей провинции Восточная Пруссия // Вестник Калининградского государственного университета. Вып*.1, 35–39. *Калининград*.

Laakso, Johanna. 2001. The Finnic languages. In: Östen Dahl and Maria Koptjevskaja-Tamm (eds.) *The Circum-Baltic Languages: Typology and Contact*. Vol. 1, 179–214.

Laanest —Лаанест А. 1993. Прибалтийско-финские языки // Jartseva — Ярцева. Уральские языки, 32–35.

Lehiste, Ilse. 2003. Prosodic change in process. From quantity language to accent language. In: Johanna Paula Monique Fikkert and Haike Jacobs (eds.) *Development in Prosodic Systems*, 47–66. Berlin: Mouton de Gruyter.

Leisiö, Larisa. 2000. The word order in genitive constructions in a diaspora of Russian. *International Journal of Bilingualism* 4: 301–325.

Lorentz, Friedrich. 1903. *Slovinzische Grammatik*. Spb. Imperatorskaja Akademija Nauk.

Mathiassen, Terje. 1997. *A Short Grammar of Latvian*. Columbus, Ohio: Slavica Publishers.

Matras, Yaron and Jeanette Sakel. 2007. Investigating the mechanisms of pattern replication in language convergence. *Studies in Language* 31(4): 829–865.

Miklosich, Fran. 1861. *Die slavischen Elemente im Rumänischen*. Denkschriften der Wiener Akademie der Wissenschaften, Philos.-historische Classe. Vol.12.

Miljan, Merilin. 2008. *Grammatical Case in Estonian*. Thesis (Ph. D.). University of Edinburgh.

Myznikova 2013 — Мызникова С. О грамматических аспектах прибалтийско-финского и севернорусского языкового взаимодействия: каузативные глаголы // Исследования по славянской диалектологии. 16. М. 2013. 338–348.

Myznikova 2014 — Мызникова С. Русско-прибалтийско-финские языковые контакты и их отражение в области диалектного синтаксиса. СПб. Нестор-История. 2014.

Nelson, Diane. 2013. *Grammatical Case Assignment in Finnish*. London/New York: Routledge.

Orel, Vladimir E. 2003. *A Handbook of Germanic Etymology*. Leiden: Brill.

Praulіņš, Dace. 2012. *Latvian. An essential grammar*. London/New York: Routledge.

Shakhmatov 1916 — Шахматов А. Введение в курс истории русского языка. Част. I. Петроград. 1916.

Sobolev 1998 — Соболев А. О предикативном употреблении причастий в русских диалектах. Вопросы языкознания. 1998. No.5. 74–89.

Sulkala, Helena and Merja Karjalainen. 1992. *Finnish. (Descriptive Grammar Series.)* London/New York: Routledge

Thomason, Sarah Grey and Terrence Kaufman. 1988. *Language contact, creolization and genetic linguistics*. Berkeley: University of California Press.

Thomason, Sarah. 2001. *Language Contact*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Timberlake, Alan. 1974. *The Nominative Object in Slavic, Baltic, and West Finnic*. München: Verlag Otto Sagner.

Tomić, Olga Mišeska. 2004. The Balkan Sprachbudn properties: An intruduction. In: Olga Mišeska Tomić (ed.) *Balkan Syntax and Semanitcs*, 1–58. Amsterdam: John Benjamin.

Toporov 2006 — Топоров В.Н. Прусский язык // Языки мира. Балтийские языки. М. 2006. 50–92.

Trudgill, Peter. 2010. Contact and Sociolinguistic Typology. In: Raymond Hickey (ed.) *The Handbook of Language Contact*, 299–319.

Trubetzkoy — Трубецкой, Н. Вавилонская башня и смешение языков // История. Культура. Язык. М. 1995 [1923]. 327–338.

Vasmer 1987 — Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. 2-е изд. Т.III. М. Прогресс. 1987.

Zajtseva 1978 — Зайцева М. И. Суффиксальное глагольное словообразование в вепсском языке. Ленинград. 1978.

Zajkov 1999 — Зайков П. Грамматика карельского языка: Фонетика и морфология. Петрозаводск. 1999.

オンライン資料

The World Atlas of Language Structures (WALS): *http://wals.info/*

Language Contact and Language Change in the Circum-Baltic Area

Keiko MITANI

The Circum-Baltic area, where genetically different languages have been spoken for long periods, provides us with a variety of evidence concerning contact-induced language change. This paper aims to describe areal features of this multilingual region, focusing on grammatical changes induced by language contact. The first section outlines the history of this region in relation to geopolitical circumstances that enabled various kinds of contact among different languages. The second section presents examples of contact-induced language change, dividing them into the type of phonological borrowing and the type of structural borrowing. After observing various types of contact-induced change, the paper proceeds in the third section to ask whether or not the notion of Sprachbund is available to this region. Indeed, the phonological property remarked upon by R. Jacobson looks to indicate that the Circum-Baltic region forms a Sprachbund. Furthermore, a word order feature in this region shows a common pattern in which SVO order combined with GN prevails. However, other contact-induced changes observed in more than two languages or dialects, such as the nominative object structure, or the evidentiality, are rather locally restricted, and fail to provide evidence that this region is a Sprachbund. Taking into account these facts, this paper concludes that this region forms a kind of language continuum formed by long-lasting language contacts.